

## 北海道北見地域の農業展開と農業集落構造

坂下 明彦

北海道における農業集落の構造は、農業構造の相違を反映して、日本の農村集落とは大きく異なる。すなわち、開発初期から現在に至るまで農業構造そのものがきわめて流動的であり、その主要ファクターをなす農家の性格や土地所有の持つ意味も自ずと異なっているからである。なかでも、ここで対象とする畑作地帯は水田地帯に比較して、その変動が著しい。

そこで、本報告では、開発過程における土地所有と農家の関係を「先着順序列」としてとらえ、農業集落の農家構成の変容を農業展開との関連で代表事例に即して明らかにしていく。「先着順序列」は、田畠保によって、集落の階層構成の一つの規定要因として示されたものであり、「入地」時期の早晚性が農家の自小作別構成や經營耕地規模の構成と相關をもち、さらには早期定着農家の存在の多寡が階層構成のあり方にも影響を与えるというものである（「北海道農業集落の階層構成の一規定要因」『農業総合研究』二三一、一九七九年）。

北見畑作農業の特徴は、その中規模集約性にあるといつてよい。それは、大規模平原の開発を通じて「チュウネン闊」的な地帯構成をなしつつ、大規模専作経営を作り上げてきた十勝農業と対照的な姿を示している。すなわち、丘陵地を多く含み、そのため地域内部

に開発時期や土地利用に大きな相違を持ち、したがって地域条件に即して農業形態を異にする経営が並立する構造である。これを「M-TS構造」（明治期開発・大正期開発・昭和期開発の分化構造）として示しながら、こうした町村レベルでの開発過程に規定された農業構造の分化を「棲み分け」の構造として捉えていく。そのうえで、以上の土地利用に規定された集落類型に即して集落内部での農家構成の動態を事例に即しておさえていく。集落間、集落内の二重の視点である。対象地は北見市近郊の訓子府町とした。

（北海道大学）